

# 景観フォーラム

## 巻頭言

日本の都市景観を眺めると、相変わらず電柱が主役を務めている。何とその数は日本全国で3,600万本もあり世界一を誇るそうだ。47都道府県で割ってみると1都道府県だけで77万本となる。阪神大震災でも証明されたが、いざ地震などの災害が起こると電柱は凶器と化す。東京都などは、徐々にでもなくす方向に動いているとは言っているが、事実として日本全体の電柱の数は微増しているという。やると言っても実はやっていない。日本の行政の在り方というものは常にこのような動きを見せているのが多々あるので、私たち日本人は慣れ親しんでしまい、都市景観上あまり違和感を持たないのが私たちの常識となっている。ところが、私たちには常識となってしまうこの電柱は、外国人には珍しく見え、電柱の多さにびっくりするという。

さて、この手の行政の動きで比較すべきものとして、上下水道の設置の歴史というものを比較したらどうであろうか。上水道は直接人命にかかわる故か、1,900年に入るところにはかなりな程度に普及したと言われているが、実際に我々の日常生活に資することになったのは、下水道含めて、1945年以降、即ち戦後世界になってからである。上下水道がやっと日本の都市生活にすべて普及したのはこの半世紀プラスアルファに過ぎないのである。そしてまだまだ電柱は厳然と目の前にそびえているのが日本の現状である。

先進国であると教育されてきた我々日本人という国民は、本当のところはまだまだ貧しい国なのである。かのイギリスでは電柱地中化100%達成が100年以上前に実施されたということである。日本では未だ10%も達成されていない。先進諸国（例えばG7諸国）ではこの電柱地中化という問題は常識であり、問題にも上げられないのが現状である。では先進国といわれる日本でどうしてこのような常識が通じないのか、それは政治の問題である。G7諸国は自ら民主主義国家を表明し、すべての国が2大政党政治を採用している。ところがどうであろう、この日の下は一党独裁政治が戦後70年以上をも実施されている。独裁政治は民主主義とは言えない。民主主義の基盤である2大政党が活発に議論をするという経験がないのである。即ち、この独裁政治に慣れ親しむように教育されてきたのが日本国民である。このような状況が長く続くとどの様なことが生じるであろうか。そう、民主主義から目を背け、選挙の投票権すら放棄してしまうということらしい。そのような国民は良い景観とは何かと論ずることもないし、電柱は常識となる。良き景観を求めることなどは遙か彼方にある。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦



### <日本景観フォーラム 2023 年度年間スケジュール>

※2023 年度とは 2023 年 4 月 1 日⇒2024 年 3 月 31 日のことです。

#### 2023 年

- 4 月 24 日 (月) **第 1 回景観研究会** 総会・第 1 回理事会 (16:30～ オンライン会議)
- 5 月 30 日 (火) **第 2 回景観研究会** (16:30～ オンライン会議)
- 6 月 13 日 (火) **第 1 回景観まちあるき** 【浦賀】
- 6 月 20 日 (火) **第 3 回景観研究会** 於：JICA 研究所 18:00～
- 9 月 30 日 (土) **第 2 回景観まちあるき** 【品川東海道界限】
- 10 月 27 日 (金) **特別景観視察会**：宇都宮市にて LRT と大谷石の見学会
- 11 月 28 日 (火) **第 4 回景観研究会** 於：JICA 研究所 18:00～
- 12 月 21 日 (木) 忘年会

#### 2024 年

- 1 月 20 日 (土) **第 3 回景観まちあるき** 【熱海】
- 2 月 20 日 (火) **第 5 回景観研究会** 於：JICA 研究所 18:00～
- 3 月 23 日 (土) **第 4 回景観まちあるき** 【両国】

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

### <日本景観フォーラム 2022 年度年間スケジュール>

※2022 年度とは 2022 年 4 月 1 日⇒2023 年 3 月 31 日のことです。

#### 2022 年

- 4 月 12 日 (火) 15:00 東京都訪問 (神宮外苑再開発を問う)
- 4 月 19 日 (火) 16:00 オンライン会議 **第 1 回景観研究会**
- 5 月 20 日 (金) **第 1 回景観まちあるき** (神宮外苑・表参道)
- 6 月 21 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 2 回景観研究会** **第 1 回理事会**
- 7 月 26 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 3 回景観研究会**
- 8 月 20 日 (土) / 8 月 21 日 (日) **特別景観視察会** (斑尾高原)
- 8 月 30 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 4 回景観研究会**
- 9 月 24 日 (土) **第 2 回 景観まちあるき** (王子・駒込界限)
- 10 月 25 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 5 回景観研究会**
- 11 月 29 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 6 回景観研究会**
- 12 月 3 日 (土) **第 3 回 景観まちあるき** (神保町界限)
- 12 月 20 日 (火) 16:30 オンライン忘年会

#### 2023 年

- 1 月 21 日 (土) **第 4 回 景観まちあるき** (茅ヶ崎)
- 2 月 21 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 7 回景観研究会** **第 2 回理事会**
- 3 月 23 日 (木) 16:30 オンライン会議 **第 8 回景観研究会**

## スイス・フリブール（フライブルグ）の町並み景観

石見茂夫

コロナ禍でこの数年海外渡航が自粛されていたが、今春からほぼ解禁になり3年半ぶりにヨーロッパに出掛けた。コロナ前からスイス旅行仲間の友人と計画を練っていて2020年に出掛ける予定だったが延期していた。アルプス訪問の他に今回は北イタリアやスイスのまち歩きも含め3週間の予定を組むことになった。

当初から予定していたエンガディン地方のサンモリッツとバレー地方のツエルマツトにそれぞれ1週間滞在しアルプスのハイキングを満喫した後に、フィンランドのヘルシンキを訪問する友人と別れスイスの首都であるベルンとその近郊のまち歩きを計画した。

ベルン駅でチューリッヒ空港に向かう友人と別れて駅の地下道を通して旧市街地の地上に出ると、近代的な外観の建物が無かった駅前には大きな鉄骨を組んだ大屋根が掛けられていてよく降る雷雨になってもゆっくり歩けるようになっていた。

アルプスの山から下りて来るとベルンは大きな町で都会の雑踏の中をトラムが行きかい多くの人達で賑わっていた。20数年前に訪れた時には古い旧市街の町並みだけで中世に迷い込んだような錯覚を受けた場所がすっかり様変わりしていて驚いた。

余談になるがこの数年はコロナの影響で世界的に国際航空便が大幅に減便されていた。更にロシアの横暴なウクライナ侵攻があり日本などの極東から欧州に行く西側諸国の航空機はロシア上空を飛べなくなった影響を受け4時間以上フライトの時間が長くなった。聞いていたフライト航路は西行のヨーロッパ方面がアラスカから北極上空を通りフィンランドに出るルート、東行の日本や極東方面はトルコから中国上空を経由との事であったが帰りの便も北極回りになっていた。

首都ベルンの紹介はまたの機会として、今回はベルン近郊のフリブールの紹介を致します。





## 1. フリブール（フライベルグ）の概要

フリブールはスイスの中央西寄りに有る首都ベルン近郊の古い都市である。フリブール州の州都でスイスのフランス語圏とドイツ語圏の境に位置していて、フランス語のフリブール、ドイツ語のフライブルグが同じように使われている。人口は38,000人の小さな町であるがフリブール大学には約10,000人が在籍している。住民の6割以上の人フランス語、2割がドイツ語、その他イタリア語等を第一言語としているが複数言語をえる人が多い。

ベルンからはジュネーブとチューリッヒを結ぶスイス国鉄（SBB）の主要幹線の途中に位置しており鉄道の利便性は高くヨーロッパの主要都市を結ぶインターシティ特急で（IC）20分位である。

1157年からの古都でスイスでは最古、ヨーロッパの中でも最も歴史が長いと言われている町である。街を取り囲むように湾曲して流れるサリーヌ川の河畔の高台にツェーリングゲン公により築かれた中世都市である。旧市街地は外周をアップダウンの有る城壁で囲まれている。

主要交通であるスイス国鉄のフリブール駅は街の高台にあり綺麗な駅前広場がある。

駅前からメインストリートのローモン通りを進むとデパートや飲食店が入る現代的な建物や商店がある。この通りには公共交通としてトロリーバスが走る。そのまま進むと道はローザンヌ通りと名前を変え緩い坂道になり下ると旧市街地に入る。

フリブールは鉄道駅の有る新市街地の高台とサリーヌ川沿いの低地部になる、旧市街地は高台からの下り坂部から低地へとまたがり高低差が大きい。

坂道に有る建物は1階が店舗、カフェ、レストランとして利用されており、2階から上の階は住宅や事務所として使われている。

街のシンボルでもある大聖堂は坂道を下り川沿いの旧市街地への途中の一角にある。





## 2. サン・ニコラ大聖堂



聳え立つサン・ニコラ大聖堂の尖塔

旧市街地の坂を下る途中にサン・ニコラ大聖堂が有るこの教会の塔はフリブールのランドマークとなっており街の多くの場所から見る事ができる。13世紀に建設された八角形をしたゴシック様式の荘厳な大聖堂はカトリック重要な拠点となっておりステンドグラスが美しい。古いパイプオルガンはリストやブルックナーに愛されていたと伝えられている。368段の階段で登ることのできる尖塔に登るとフリブールの街が一望できるようであったが、スイスも異常な暑さの中では登る気力が無くなった。





美しいステンドグラス



旧市街地の小広場から見る尖塔

### 3. ベルン橋

サリーヌ川に架かるベルン橋は木造で出来ており同じく木製の屋根が掛かっている。

自動車も通行可能であるが幅員が狭いので橋上でのすれ違いは出来ない、両方向とも橋のたもとで自動車は一旦停止して対向車が来ない事を確認してから橋に乗り入れる。大型バスも乗り入れているが幅員ギリギリで歩行者は屋根を支える柱の脇に退避しなければならない。日常的に生活の道路として使われており、特に混乱する様子も無くお互いに譲り合って利用されている。

このサリーヌ川を境にフランス語圏とドイツ語圏に分かれているようである。スイスは公用語が4か国語あるが主要なドイツ語とフランス語がこの川を境に使い分けられている。





ベルン橋内部



大型バスは狭い橋をゆっくりと通過する

#### 4. 城壁

フリブールの旧市街地は城壁で囲まれており高低差が大きいので城壁もアップダウンが大きいが連続して作られている。

ほぼ階段の連続する城壁は要所の見晴らしの良い所に見張り台の塔が作られている。



高低差の大きな城壁は階段の連続



## 5. ミニケーブルカー（フニクラ）

市街地の高低差が大きいフリブールの観光名物でもあるケーブルカーは市民の実用的な交通手段にもなっている。1899年に作られたミニケーブルカーはタンクに水を溜めてその重さを動力として利用するユニークな構造で作られている。シンプルな究極のエコシステムは大きな二つのバケツの片方に水で満たすと重力で下がると同時に反対側は自動的に上がって来るつるべ式の構造を応用している。

ケーブルカーの脇には屋根付きの階段が作られている。

乗車料金は1回2スイスフラン（320円） ちょっと高い感じがするので利用者は少ない。



フニクラ下駅



フニクラから下の町並み



急こう配を上下するフニクラ



中間地点でのすれ違い



## 6. 街角の風景

狭い道で坂道が多いフリブールでは宅配もバイクで行われる



緑に囲まれた市街地は花や蔦類で緑化されている



市街地の主要交通はトロリーバス

## 旧東海道（品川宿）を歩く

豊村泰彦

今回の日本景観フォーラムの「まち歩き」は旧東海道の品川宿である。連日、厳しい残暑が続く日々も 9 月最後の土曜日は幸い曇り空で。強烈な日差しもなく快適に散策することができた。スタートは JR 品川駅から京浜急行一つ目の北品川駅を下車したあたりで、そこから、旧東海道を立会川までの約 3km の道のりを辿る。品川は平安時代からその地名があり、鎌倉時代には江戸湾の港として栄えたという。江戸時代に入ると、沿道には由緒ある寺や神社が建てられ、どこことなくかつての宿場町の面影が残っている。



### ■旧街道の道幅は狭い

道幅はせいぜい 10 メートルくらい。車もあまり通らないので道の真ん中に立って通りを見渡すとまず小規模な商店、飲食店、ゲストハウスなどの宿泊施設が見られる。一見どこにでもある商店街である。その中にあって「スパーホテル」という聞いたことがないホテルの看板が目に入った。これは最近できたものだろうか。

あとで、調べてみたらなんのことはない全国に 135 店舗もある「ビジネスホテル」のチェーン店だった。言葉的にはスパーとは「超越」という意味だからホテル以上に優れた何かを期待したくなるが、その外観はデザイン性は微塵もなく、どちらかというと倉庫的な形状の建物のような気がする。名称に胸踊らされるされる人もあるかもしれない。





## ■品川宿の歴史

旧東海道の周辺には歴史を感じるような街並みは希薄になったが、歴史を伝える街の記憶は道路や敷地の形状。路地や横丁などに残されており、地域文化としての街並みの痕跡を見つけることができる。

この中で特に期待したのは、江戸時代以来の「遊郭」の痕跡である。江戸の幕末には90軒あまりの遊郭があったというが、さらに時代が進み、関東大震災（1923年）によって吉原が焼けたあと、品川宿の遊郭は大発展することになったそうだ。品川も震災の被害は受けたものの倒壊や火災はなかったからだ。実際、震災後の品川宿の客の殺到ぶりはすさまじく、数か月は連日連夜満員客止めで、1922年までは年間33万人だった客数が24年には53万人に増えたというのだ。しかし今日、そのわりにはそれらしい名残は街道沿いには見られなかった。居酒屋や飲食店は最近の商店街などと比べると多い感じがしたが、宿場町と多少関係はあるのだろう。



## ■多い神社や寺

この界隈の特徴は神社や寺が多いことである。その一つ品川神社は、街道から少し外れたところにある神社で創建は1187年である。1600年には徳川家康が関ヶ原の戦いへ出陣の際に戦勝祈願をしたそうだ。なので、とても重要な神社なのである。ここは富士登山の疑似体験ができる？大きな「品川富士」や、銭洗いで金運がつくという「一粒万倍の泉」が有名で、なかでも当社のご利益は「金運」で「金運向上」を願う人々が後を絶たないくらいだという。今回は時間の関係で割愛したが、別の機会にぜひ行きたい。

品川宿から巣こそ外れたところになる品川寺（ほんせんじ）は遠く806年～810年に創建された品川で最古とされる寺院である。江戸城を築いた太田道灌によって伽藍が建立された。入口にある大きな銅造地藏菩薩坐像が高さが3m近くあり「江戸六地藏」の一つで東京都有形文化財に指定されている。また、境内には石像が多くここだけで七福神をお参りできるということでも好評だという。



## ■坂本龍馬像

まち歩きの最後は、旧東海道から立会川の商店街に入り、30m ほど行ったところに坂本龍馬像が立っている。それを眺めて今回のまち歩きは終了とした。なぜ龍馬像なのか。実は龍馬はかつてこの界隈に住んでいたのだが、過ぎしたのは19歳のときらしい。立会川には当時、土佐藩の下屋敷があり龍馬は土佐藩で見張り番をしていたらしい。それでも銅像が立ってしまうのだから龍馬の人気は高いということだろう。ある調査では1万円札になってほしいという有名人で「坂本龍馬」は上位にランキングされているという。

ということで今回の旧東海道を歩いて、古きよき懐かしい風景が残っている街並みを褒め称えたり、開発によって壊わされていく残念な景観に批判浴びせながらぶらぶらと散策した。





## &lt;シネマレビューNo.2 (2023年9月)&gt;

齊藤全彦

## ■『戦争と正義』セルゲイ・ロズニツァ監督作品

このセルゲイ・ロズニツァという人物は「1964年ベラルーシで生まれ、ウクライナのキエフで育つ。1987年にウクライナ国立工科大学を卒業後、科学者として国立研究所で人工知能の研究をしていたが、ソ連崩壊の年である1991年にモスクワの全ロシア映画大学に入学し映画監督への道を歩み始める」という経歴である。過去の記録映画を全編に使用して歴史を再構成する“アーカイヴァル・ドキュメンタリー”を得意とし、2021年の第74回カンヌ国際映画祭で発表した『バビヤール』はドキュメンタリー部門で審査員特別賞を受賞する。さて、『戦争と正義』は二部構成になっている。『破壊の自然史 “The natural history of destruction”』（2022年）と『キエフ裁判 “The Kiev trial”』（2022年）である。



## ■『破壊の自然史』ドイツ・オランダ・リトアニア 英語・ドイツ語 105分 カラー・モノクロ

「第二次世界大戦末期、連合軍はイギリス空襲の報復として敵国ナチ・ドイツへ”絨毯爆撃”を行った。連合軍の”戦略爆撃調査報告書”によると、イギリス空軍だけで40万の爆撃機がドイツの131都市に100万トンの爆弾を投下し、350万件の住居が破壊され、60万人近くの一般市民が犠牲となったとされる。技術革新と生産力の向上によって増強された軍事力で、罪のない一般市民を襲った人類史上最大規模の大量破壊を描く。人間の想像を遥かに超えた圧倒的な破壊を前に想起する心をへし折られたドイツ文学者たちと、ナチ・ドイツの犯罪と敗戦国としての贖罪意識によってこの空襲の罪と責任について戦後長い間公の場で議論することができなかった社会について考察する、ドイツ人作家W.G.ゼーバルトの”空襲と文学”へのアンサー的作品」という内容になっている。戦争は殆ど”正義”の御旗の下に開始される。そして、その正義は”破壊”のみしか残さない。それが戦争の本質ではないか、という問いかけである。

## ■『キエフ裁判』オランダ・ウクライナ ロシア語・ウクライナ語・ドイツ語 106分 モノクロ

「1946年1月、キエフ。ナチ関係者15名が人道に対する罪で裁判にかけられる。この“キエフ裁判”は、第二次世界大戦の独ソ戦で、ナチ・ドイツとその協力者によるユダヤ人虐殺など戦争犯罪の首謀者を断罪した国際軍事裁判である。身代わりを申し出る母から無理やり幼子を奪いその場で射殺し、また生きたまま子供たちの血を抜き焼き殺すなどという数々の残虐行為が明るみになる。被告人弁論ではありがちな自己弁明に終始する者、仲間に罪をなすり付ける者、やらなければ自らも殺されたと同情を得ようとする者等と、その姿にハンナ・アーレントの“凡庸な悪”が露わになる。アウシュヴィッツやバビ・ヤールの生存者による未公開の証言記録も含む”ニュルンベルク裁判”と”東京裁判”に並ぶ戦後最も重要な軍事裁判が現代に蘇る。」最後は何万という群衆の中心で彼らの絞首刑が執行される。

目にしたくないものをしっかり見るということは苦痛を伴うことであるかもしれない。しかし、現に今、ウクライナでは戦争が行われており、当事者たちにはただ苦痛という言葉だけでは表現できない事件の数々が生起している。世界の人々はもっとこの戦争の実態を凝視して、早く終わらせなければならない義務と責任を負っているのではないか。（齊藤全彦）

## &lt;LFJブックレビュー 81&gt;

『エドワード・ホッパー作品集』江崎聡子著 (2022 年 4 月刊) 東京美術

斉藤全彦

エドワード・ホッパー (1882-1967) というアメリカの画家はパブロ・ピカソ (1881-1973) とほぼ同時代を生きた芸術家である。そして、転変が激しいアメリカ社会において「ホッパーの芸術は没後も見事に生き延び、今日においてもアメリカ美術を代表する画家としての評価はゆるぎない。それどころか、ホッパーほど“アメリカ的風景”を描いたアメリカ人の画家として、合衆国だけでなく、国際的にも評価されてきた画家はいないだろう」ということである。

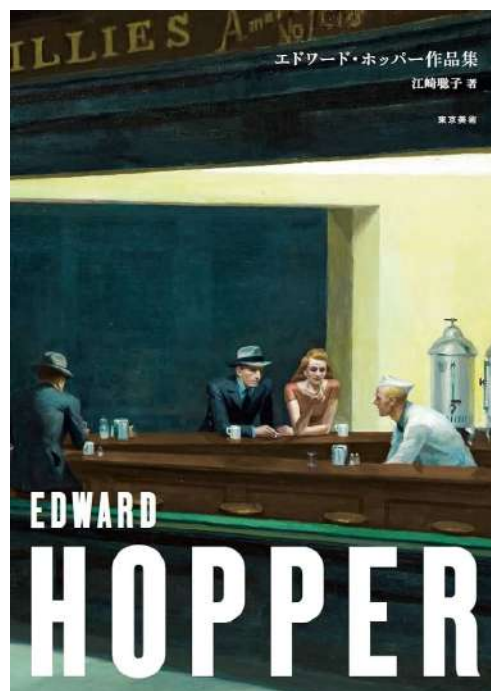
さて、アメリカ合衆国には世界を牽引する産業群の数々はあったとしても芸術と名の付くものはあったのであろうかと首をひねる御仁がいるのではないだろうか。当時、ヨーロッパに芸術の女神を求めてその身を投じたヘミングウェイ (1899-1961) のような若者は数知れず、ホッパーもその一人であった。1776 年に独立宣言を発し、ヨーロッパが芸術の爛熟期を迎える 19 世紀末の頃はアメリカ合衆国の文化内容の程度は人間でいえばやっと青年期に達した頃であろう。桑原住雄著『アメリカ絵画の系譜』(美術出版社 1977 年刊) などによれば、最初のアメリカ人画家はアマチュア集団から発し、生活住民の求めに応じ、お祈りのための宗教画とか記念のための肖像画などを描くところから発生したとする。確かに、独立革命時には肖像画が大いに広まり幅広い職人性が求められたという。その中から、現代でいえば写真機の代替として肖像画やアメリカの大自然を写し取る風景画が求められ、ハドソン・リヴァー派などが発生した。そして西部への開拓時代、開拓者の心を満たした絵画における神秘主義の展開、南北戦争から生じた写実絵画の需要、そして世紀末に向かって写実主義が謳歌し、アメリカ絵画の王道となる。

まさに 19 世紀末から芸術活動を始めたホッパーは彼を取り巻くアメリカ合衆国の風景が大変革をもたらしていた時期を生きてきたことになる。即ち、アメリカの近代化があらゆる環境を作り上げ、ホッパーはその風景をなぞるように時々刻々変わりゆくアメリカそのものを描いてきた。そこにはナショナリズムの方向性が生じ、「退廃し、墮落した古いヨーロッパとは違うアメリカの新しさを強調する流れ」というものであった。

ではホッパーの独自性というものはどういうものであろうか。「アメリカン・シーン派と分類されることをひどく嫌っていたホッパーは、古き良きアメリカを否定していたとも考えられる」のである。彼の絵画の特徴として「禁じられたものをひそかに眺める、いわゆる窃視を暗示する構図が見られ」たり、また「対象を斜め上から見下ろす俯瞰的視線による構図が用いられている」等の独自性があげられる。恐らくそれは、「アメリカの風景に対するホッパーの冷静な距離を置いた態度、または文化や教養のない粗野な 20 世紀初頭のアメリカへの嫌悪」というものかもしれない。

しかし、ホッパーの絵画を見ていると、すべての絵画が何かを問いかけてくるのは彼の大きな特徴ではいだろうか。言い換えれば、すべてのホッパーの絵画には“物語”があると言えるのかもしれない。

(斉藤全彦)





〒150-0031  
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502  
TEL : 03(3780)3814  
FAX : 03(6379)6681  
E-mail : [info@keikan-forum.com](mailto:info@keikan-forum.com)  
URL : <https://www.keikan-forum.org>

